

修士論文(要旨)

2015年1月

中国における日本語専攻大学生の自律学習についての考察
—学習意識と学習行動を中心に—

指導： 齋藤 伸子 教授

言語教育研究科

日本語教育専攻

213J3002

于 博

Master's Thesis(Abstract)

January 2015

A Study of the Autonomous Learning Abilities of Chinese University Students Majoring in
Japanese Language
— Focusing on Independent Learning Awareness and Learning Activities —

Yu Bo

213J3002

Master's Program in Japanese Education

Graduate School of Language Education

J.F.Oberlin University

Thesis Supervisor: Nobuko Saito

目次

第1章	研究背景と研究目的	1
1.1	研究背景	1
1.2	研究目的	2
第2章	先行研究	3
2.1	自律学習の定義と関連研究	3
2.2	自律学習における教師と学習者に関する研究	4
2.3	自律学習における学習者の意識と行動に関する研究	6
第3章	研究方法	8
3.1	用語の定義	8
3.2	アンケート調査	8
3.3	フォローアップインタビュー	11
第4章	調査結果の分析	13
4.1	グループ A	13
4.2	グループ B	15
4.3	グループ C	19
4.4	グループ D	22
4.5	グループ E	25
4.6	グループ F	28
4.7	グループ G	29
第5章	分析のまとめと考察	35
5.1	研究分析結果のまとめ	35
5.2	自律学習のプロセスへの考察	36
5.3	自律学習に関わる学習態度への考察	40
5.4	総合的考察と今後の課題	41

要旨

近年、様々な教育場面において学習者の自律性を重視する自律学習という概念を提唱した教育が実施されている。国際交流基金のデータによると、2012年に中国における日本語学習者数は世界一位になり、1,046,490人に達した。そして、中国の日本語教育に関する機関は1800機関になり、そのうち日本語専攻を設ける大学は823カ所になった。日本語専攻の大学生の学習目的は主に日本文化への関心、将来の就職などであり、近年ではインターネットを通じて世界中からアクセスがしやすくなっているため、ポップカルチャーへの興味、日本への留学、日本語でのコミュニケーションなど様々な事情で学習者のニーズも多様化している。学習者の言語運用能力を重視するだけでなく、多様化のニーズに応じて、日本社会文化、異文化交流を重視して、学習者の個性に対応した日本語教育が求められるようになった。その状況に応じて、自律学習は日本語教育の一つの課題として研究されている。

言語教育における自律学習という概念は1960年代のヨーロッパで生まれた。責任ある市民を育てるためには、教育においてオートノミーを育てることが不可欠であるという認識が生まれた(Brumfit, 1984)。1970年代、先進工業国では物質的な進歩が行き詰まり、人生の質の豊かさが求められるようになってきた。オレック(Holec, 1981)は成人教育における理論に言及し、人が自分の人生の著者であるために自律学習が必要だと述べている。(青木・中田, 2011)

リトル(2011)は自律(autonomy)という用語を「自分自身を距離を置いて見ること、批判的内省、意志決定、及び人に頼らずに行動するための能力」と定義していた。

青木(2005)は、自律学習とは、「学習者が自分で自分の学習の理由あるいは目的と内容、方法に関して選択を行い、その選択に基づいた計画を実行し、結果を評価すること」である。と定義した。

先行研究により、自律学習能力は学習者の生まれつきの能力ではなく、いろいろなアプローチによって育てるものであることが明らかになったが、自律学習において学習者がどのような役割を担っているか、また、学習者が自律学習能力を養成するためにはどのような意識を持つ必要があるか、さらにどのような学習行動をしているかを解明することが重要な課題と思われる。従って、本研究は中国の日本語専攻大学生の自律性を概観し、学習者における学習意識と学習行動を明らかにすることを目的とする。さらに、学習者の観点から中国の大学日本語教育への示唆を提示する。

それを解明するために、中国の大学の149名の日本語専攻学生を調査対象とし、アンケート調査を行った。その後、8つの問題に焦点を当て、3名の協力者にフォローアップインタビューを実施した。

データの分析枠組みについては、自律学習のプロセスと自律学習に関わる優秀な学習態度に基づいて、「A 学習目的と学習目標を設定する」、「B 学習方法と学習リソースを選択する」、「C 学習計画の遂行と自己モニター」、「D 学習成果の評価」、「E 学習中の気持ちをコントロールし積極的に学習する」、「F 周囲の状況を利用して学習環境を整える」、「G 他者(教師も含めている)に依存せず、自分の学習に責任を持つ」という7つのグループに分けている。

7つのグループをグループごとに学習意識と学習行動を概観し分析する。そして、各グループ

に対応するフォローアップインタビューのデータを加え、詳しく分析する。分析により、自律学習に対して、中国の日本語専攻大学生の学習意識と学習行動の実態を解明した。さらに、意識と行動とのズレも言及した。

郭（2013）は教師が自律学習における意識と行動を向上させるために、まず、自律学習に関する意識を実践に移し、同時にその意識を内在化し、教師の習慣にし、最後に、自分の実践への振り返りにより、自分の行動に修正を加える必要があると述べた。中国の日本語専攻大学生にとっては、自律学習における意識と行動を向上させるために、まず、自律学習のプロセスと自律的な学習態度を意識化し、次に、その意識を習慣にし、実践しながら修正することが必要とされていると言えるのではないだろうか。

また、国外での英語の自律学習の誕生と発展には以下のような特徴がある（陳 2006）。①目標言語環境と文化環境があること、②マルチメディアなどの学習リソースと固定な学習場所を設置すること、③柔軟性がある学位制度が立てられ、学習者は自分のニーズに基づき自律学習センターで学習することができること、④成人学習者を対象とすること。中国の大学日本語教育の場合は、自律学習を発達させるために、以上のような要素を考えなければならない。中国の伝統的な教師主導型の教育では、「強制力」という教師からの圧力は重要な役割を果たしている。そこで、自律学習が生じる要因と中国の実情を合わせて考慮し、伝統的な「強制力」を自律学習の中で応用し、中国での自律学習を発展させることを今後の課題として検討する必要がある。

参考文献および出典

- 青木直子 (2005) 「自律学習」 日本語教育学会編『新版日本語教育事典』 大修館書店 pp. 773-774
- 青木直子 (2008) 「学習者オートノミーを育てる教師の役割」 『英語教育』 vol. 56, No. 12, 大修館、pp. 10-11
- 青木直子・中田賀之 (2011) 編『学習者オートノミー—日本語教育と外国語教育の未来のために—』 ひつじ書房
- 家田章子 (2008) 「自律的な学習を目指す日本語授業の取り組み」 桜美林大学
- 臼杵美由紀 (2005) 「上級中国人学習者の日本語学習に対する意識と成功への鍵：インタビュー調査からの考察」 『上越教育大学研究紀要』 No. 24 pp. 531-543
- 梅田康子 (2005) 「学習者の自律性を重視した日本語教育コースにおける教師の役割—学部留学生に対する自律学習コース展開の可能性を探る—」 『言語と文化』 (12) (39)、pp. 59-77 愛知大学語学教育研究室
- 尾関直子 (2013) 「CAN - DO リストと自律した学習者」 『東北学院大学論集』 英語英文学 (97) pp. 147-158
- 郭佳毅 (2013) 「学習者オートノミー養成における日本語教師の意識と行動に関する比較研究」 北京外国語大学 修士論文
- 衣川隆生 (2009) 「学習要因の意識化を目指した教室活動の検討」 『日本語教育方法研究会誌』 vol. 16 No. 2 2009-9 pp. 54-55
- 齋藤ひろみ (1996) 「日本語学習者と教師のビリーフス：自律的学習に関わるビリーフスの調査を通して」 『言語文化と日本語教育』 pp. 53-69
- 鈴木理子 (2009) 「自律的な学習を支援するために—教師の専門性を考える—」 『日本語教育方法研究会誌』 vol. 16 No. 1 pp. 70-71
- 舘岡洋子 (2002) 「日本語でのアカデミック・スキルの養成と自律学習」 『東海大学紀要』 留学生教育センター 22, 1-20, 2002 pp. 1-20
- 日本語教育専門用語集 (1998) 国立国語研究所
- リトル (2011) 「第2章 学習者オートノミーの実践」『学習者オートノミー—日本語教育と外国語教育の未来のために—』 ひつじ書房
- オックスフォード. R(1990) Language Learning Strategies :what every teacher should know. New York:Newbury House. 宍戸通康・伴紀子(1994) 『言語学習ストラテジー』 凡人社
- 陈冬纯 (2006) 「试论自主学习在我国大学英语教学中的定位」 外语界 2006 年第 3 期 pp. 32-37
- 邓娜 (2006) 「大学英语本科生自主学习观念与自主英语学习行为研究」 中国人民大学
- 参考 URL (最終検索日 2014.07.05)
- 国際交流基金 『2012 年度 日本語教育機関調査 結果概要 抜粋』
http://www.jpff.go.jp/j/japanese/survey/result/dl/survey_2012/2012_s_excerpt_j.pdf
- 中国知網
<http://www.cnki.net/>